chess～敗北ノ世界～

スクナヒコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｃｈｅｓｓ～敗北ノ世界～

【Ｎコード】
Ｎ５８４５Ａ

【作者名】
スクナヒコ

【あらすじ】
ｃｈｅｓｓ、それは敗北という名のゲーム――――――（作者より）
都合により、しばらく更新無いですゴメンナサイｏ（＿＿＊）ｏたまに更新いたしますが、定期的に見てくださっている皆様に感謝と謝罪を述べさせていただきます。うん、もちろん書く気あるから、見捨てないでね～

戦の足音（前書き）

初投稿です。
至らないところだらけですが、温かい目で見守りください。

戦の足音

数年前、画期的な次世代コンピューターが開発された。
従来の物とは全く異なるそのコンピューターは、それがために闇の中へと葬られた。
たった一つ残ったそれは、プロジェクトの中では『ｃｈｅｓｓ』と呼ばれていた。
しかし『ｃｈｅｓｓ』は消えた、プロジェクトのリーダーであった鬼頭博士と共に……。
分かっているのはプロジェクトの目的。
すなわち「現実世界と平行した物理原理を持ち、自己進化を続ける」ということ。
耳を澄ませば聞こえてくる。
『ｃｈｅｓｓ』の中で起こる戦争の音が……

はじめ（前書き）

大幅修正完了

はじめ

一日の授業を寝過ごしたせいで頭が痛いのに、かまわず一（ハジメ）が話しかけてくる。
一は幼馴染みで性格は男みたい奴だが、膨らんだ胸に綺麗に整った顔付きは、黙ってれば美人の類だ。
こんな説明している時点で、美人に分類されてないと分かるわけだが。
「聞いてる！？」
「いや何ツーか陽の光が……うぅ、溶ける」
「吸血鬼かあんたは！」
「そのツッコミする人とか久しぶりだなぁ」
くだらないやり取りをして、やっと目が覚めてきた。
どうやら授業終わって結構時間過ぎてるらしく、教室を見回しても俺と一しかいなかった。
いつもながら思うが、何のために俺は学校に来ているのだろう？
いや、不思議不思議。
「んで、どーなの？」
「何が？」
誰も戸締りをしない教室は、夕日に赤く染まっていた。
きれいだなぁ、と思いながら徐々に覚醒に近づく。
寝起きで体が熱かったが、窓から入る風が程よく体を冷ましてくれた。
まぁ、対照的に熱を上げている目の前の女性に若干肝も冷やしているのだが。
「遊びに行っていいかなって聞いてるんだけどなぁ、お姉さん？」
すこしキレ気味の顔でにらんでくる一、しかし今日ははずせない約束があった気がしたんだよなぁ。
俺の足を小刻みに蹴ってくる一を無視して、とりあえず大事な約束

を思い出す。
たしか、雀とビデオを……ジャンルはたしか？
……やばい、雀とのＡＶ鑑賞会だよ今日。
「ごめんねぇ、今日は雀君と遊ぶ予定が―。」
「雀？ならいいよね、私もいくから」
何ー！？
「ちょっ、えっ！？」
「んじゃ、さっさと帰ろ？」
一の侵入阻止を必死に考える俺に対し、一は俺に笑いかける。
……反則だよ、惚れた女の笑顔って
しょうがない、雀に普通の映画借りてくるよう頼んどこう。
そんな日常のひと時が、あんなに大切とはその時はまだ思いもしなかった。

行方不明だった老人

「お帰り神也、一」
一と一緒に家に帰ると、すでに雀はついていた。
綺麗な黒髪を方までのばしたこの男も、やはり俺の幼馴染だった。
俺や一とは頭の出来が違うため、違う学校に通っている。
それでも、毎日のように遊び続けているコイツと俺は『親友』だ。
「スマン雀、奴を阻止できなかった」
「いいよ、ビデオなら何でも良かったんだろ？はい、フランダースの犬」
「フランダースの犬かよ……」
一には聞かれないように、男同士の話を進める。
つーか、フランダースの犬ってどんな趣味だよ……
「なに二人だけでこそこそ話してるのかな？」
「いや、ちょっとな」
のけ者にされていた一が小刻みに俺の足を蹴ってくる。
いつものことだから雀もニコニコしながら傍観しているが、冗談じゃない。
こんなの毎日くらっているせいで、俺の脚は鋼鉄の足になってしまっているんだぞ？
いまや、ムエタイとかローキックとか大得意になってしまったし。
「そういや神也、どうして今日は映画鑑賞会なの」
「えっ！？映画鑑賞会だったの？」
雀のおかげでやっと蹴りが止まった。
まぁ確かに驚くよな、高校生にもなってお友達と映画鑑賞会。しかも当初の予定だと男二人。
更にフランダースの犬というのが哀愁を漂わせる。
しかし、今回は違う！
「ふふふ、君達はこの私がただの変人には見えまいな」

「うん」
「非凡な変態に見える」
「くっ、まぁいい。今日は多少の戯言も許してやろう」
そう言いながらも俺たちは居間に向かう。
そこには万年コタツと化した堀ゴタツがある。
そこに、昨日俺が見つけた大いなる遺産があった。
「これを見ろ！」
余談だが、うちの爺さんは科学者だった。しかもマッドのつく。
今は家でただの駄目老人と成り果てているが、昔はそれなりの権威だったらしい。
この家だってカラクリ屋敷みたいにできているし、いまだに良く分からないスペースもある。
（たまに学者さんたちが探索に来るしなぁ）
そんなカラクリ屋敷に住む俺は、おもむろに掘コタツのなかの灰を押す。
「火も入れない堀コタツなんておかしいと思ってたんだ」
まぁ、昨日偶然足をつっこんで発見しただけなんだけどね。
今まで気づかないのおかしいとかそういうツッコミもスルー、それが俺流。
まぁ、そんなわけで重い音とともに掘コタツの底はその口をあけ始めていた。
「たぶん、これが爺さんの最大のギミックだろうね」
そういって開いたコタツ、そこには地下へと伸びるはしごがあった。
「この下だ」
俺は冷たく堅いハシゴに手をかけると、そこを降り始めた。
上を見ると、一と雀も降りてくるのが分かった。
「上を見るな！！」
どうやらお気に召さなかったらしい、決して大根には見えないその足から容赦のない蹴りが飛んできた。
一、まだ女の誇りはあったか……

５メートルほど降りたところで、ハシゴは終わっていた。
全くの暗闇なので、ハプニングに見せかけ一の胸を……と思ったが、異様な殺気を感じたので昨日見つけておいた電気をつける。
どうやら上の入り口と連動しているらしく、上からは重い遮蔽音が聞こえてくる。
それと入れ替わるように転々と点く人口の光に、巨大なモニター俺たちの前に現れた。
「「なにこれ！？」」
「驚いただろう。爺さんのコンピュータと思われる物だ」
実際はなんだか分からないけど、うちの爺さんの物だからそんなんだろう。
あのジジイ、七十五にもなって趣味がゲーム、パソコンいじり、昼寝というニートっぷりだったからな……。
彼らは大きさのみに目を奪われていたが、実際その性能も化け物並であった。
モニターに隠れて見えないが、本体が部屋一つ分あり、メモリーが１００ギガ、ハード容量２００テラという化け物だ。
「これで、映画鑑賞」
「「すげぇ！！」」
ちなみに、このことは家族にも教えてない。
っていうか、親は昔死んでいた、だから顔も合わせられない。
ちなみに、
「早く見ようよ！」
意気込む一を手で制しながらこの化け物を調べ始める。
ちなみに、八畳はあるだろうこの部屋は、殺風景でソファが一組あるだけだった。
他には良く分からない機械がごちゃごちゃしていたが、その辺は俺は気にならなかった。
今気になるのは、この化け物で見た犬と人。きっとライオンキングとギガンテスに見えるんだろうなぁ。

「っていうか、これどうやって電源つけんだろ？」
自分のパソコンとおんなじ感覚でやればいいと思っていたが、複雑にできている爺さんのコンピュータは想像以上に厄介なものだった。
「早くしろよー」
「所詮フランダースだけどな」
くそっ、言いたい放題言いやがって！えっと？この配線がこうなってるから？つーことは、電源コッチか？いやいや、爺さんはひねくれてるからきっとこっちに……。
そんな風に頑張っている俺はどうでもいいらしく、一と雀は部屋の観察を始めたようだった。
うん、暇だったら手伝って欲しいなぁ、マジで。
「すごーい！」
「よくわかんないけどね」
「っていうか、神也遅すぎない？」
「大変なんだよ、そんな事言わないの」
後ろから、一の小言が俺の背中に突き刺さる。
そんな言葉の刃を知らない振りしながら、俺は必死に電源を探す。
不意に、赤く光るボタンを見つけた。
どうやら、モニターが暗くなっていただけで、コンピュータの電源はついていたらしい。
肩をおろす俺の横に、ようやく手伝いに来たらしいアホがいた。
まぁ、そのアホは俺の想い人でもあるのだが……。
「どう？」
「電源ついてたっぽい」
「あほ」
「くっ、否定できない……」
アホにアホといわれて若干屈辱にまみれながらもマウスを取り、ブラックアウトしているモニターをつけようとした。
その時だった。
「神也！一！神也の爺さんが倒れてるぞ！」

「えっ！？」
突然の情報に耳を疑う。
爺さんが？たしかに二・三日前から見ないとは思ってはいたけれど……、昨日来たときは気づかなかったぞ？
雀のほうを向くと、確かにそこには爺さんが倒れていた。
急いでマウスを置くと、爺さんのほうへ駆け寄った。
どうやら、それと一緒にモニターもついたようだった。
そんなことは気にかからなかった、行方不明だった爺さんがなぜここにいるのかが重要だった。
だから、気づかなかった。
モニターの中でうごめく英数字に。
勝手に打ち出される俺達の名前に。
そして、打ち出されていくＥＮＴＥＲという文字に。
「爺さん！」
腕に爺さんを抱いた瞬間、部屋は光に包まれた。
急に光りだしたモニターに目を眩まされ、不意に襲ってきた眠気に意識をさらわれ。
俺達は暗転の中、不思議な世界へ誘われた。

白い騎士

「っ痛！」
どうやら頭をぶって気を失っていたらしい。
鈍い痛みのする後頭部をさすりながら目を開けると、眩しい光が俺の目に飛び込んできた。
「そうだ！爺さんは！？」
そうだ！爺さんが倒れてたんだ！この部屋で！この、部屋……で？
「なんじゃここはぁ！？」
部屋だと思って見回すと、そこは部屋なんかじゃなかった。
「森？」
そう、俺の目の前にうっそうと茂る木々や、ひしめき鳴きあう鳥達が俺のいる場所を明確に教えた。
そうか、これは爺さんの仕業だな？
前にも言ったとおり、俺の爺さんはマッドのつく科学者だ。
思い出すたび泣きそうになるギミックを、俺は小さい頃からいくつも受けてきた。
「どうせ、外に飛び出すギミックか何かだろ。はぁ、一達はどこだろ？」
どうせ、あの爺さんも人形だ。そうに決まっている。
前は蛇の人形だと思ったら本物だったって事もあったけど、それの逆バージョンみたいなもんだろ。
そんなことを考えながらそこら辺の草木を掻き分ける。
「ツーか、こんなのに引っかかってばっかだから俺に変なあだ名つくんだよ」
そう、爺さんのギミックは一つ二つと受けていくたびに小さな俺に傷を負わせていた。
そんな心の傷は、俺に一つのあだ名を作り出した。
「百のトラウマを持つ男だなんて冗談じゃないぜ。ッたく」

やってられない、今こうして歩いているにも足元が気になってしようがない。
ここには落とし穴はないよな？とか考えていると、いきなり上から人の声が聞こえた。
「今の話は真か！？」
「おうよ！真も真！実際は百なんてもんじゃねぇ、千はあるな」
幼少時代の俺にだいぶ同情する……ってあれ？
ノリで、突然の声に対応とかしちゃったけど、うえから声って……
「あんた、だれ？」
俺が顔を上げると、そこにはいつの間に馬に乗った騎士がいた。
白馬に乗ったそいつは、コスプレでもしてんのかと思うほど白い鎧に、白いフルヘルムをしていた。
うん、騎士。まごうことなく騎士。
でも、コスプレには似合わない大きな槍は、その格好が伊達ではないことを示していた。
伊達に爺さんのトラップは受けていない、その槍は本物だった。
「おい、少年よ！今の話は本当なのだな！いや～今日はついている、即戦力が三人も手に入った」
騎士は嬉しそうに、馬を下りた。
馬を下りた騎士は、それでも俺より頭一個分背が高かった。
「少年よ、私はナイトだ。ホワイトナイトといえば分かるだろう？」
唖然としている俺に騎士は手を差し出していた。
っていうかホワイトナイトってあんた。
コスプレにしか思えない俺には、えっ？有名なのそのキャラクター？としか言いようないですよ？
「どうした少年？大丈夫か？」
俺が反応に困っているのを見て、調子が悪くなったように見えたらしい。
そのごつい姿に似合わず、オロオロしている騎士の姿は妙に面白かった。

笑っちゃいけないんだろうとは思い、必死にこらようとしたが、結局こらえきれずに俺は笑った。
「アハハッ！」
「狂ったか少年？」
「いや、すいません。アハハハハッ！」
「とりあえず落ち着け！ほれ、水でも飲むか？」
やたらと親切なナイトはどこから出したか水を俺に差し出してくれた。
どうやら地味にいい人っぽい。
「すいません、水までもらって」
「いや、それはいいのだが、少年よ、名はなんと言う？」
「俺は鬼無神也といいます。あなたは？」
「？変わった名前だな。まぁいい、俺の名前はホワイトナイトだ。今さっき言っただろうが」
「えっと、そのキャラクターの名前じゃなくて、本名教えて欲しいんですが？」
「なんだと！？この私を知らぬのか？ほれ、Ａ－３区領主のホワイトナイトだ」
なんだ？人がいいのと電波具合は無関係なのか？
そんな思いが僕の胸に浮かぶが、ナイトがそんなこと知るわけもない。
つくづく思うが、人は他人の考えなど理解できないのだ。
「まぁいい、とりあえず神也。お前の虎と馬を操る能力が欲しい。わが城に招待しよう」
そういい、ナイトは俺をそのたくましい腕で馬の上に乗せ、自分も白馬にまたがった。
それよりも、いまどきトラウマと虎馬間違えるの日本人でもいねぇよ！？
「今日はゲストが三人か、食卓がにぎやかになるなぁ！」
「ちょっ、待ってくれ、一達探さなきゃいけｎ……グふぇッ！」

「そうそう、神也。馬の上で喋るなよ？舌かむぞ？」
「先に言ってくｒ……グフェッ！」
「虎と馬か、強そうだなぁ……」
こうして、何かを激しく勘違いしているナイトと俺は、馬に揺られて森から抜けていった。

「痛い……」
馬に揺られて二～三十分はしただろう、俺はズキズキと痛む口を押さえながら馬を下りた。
乗馬なんて初めてだったから喋っても喋らなくても舌をかんでしまい、口の中にあるのは苦い鉄の味だけ。
なんつーか、尻も痛いし。例えるならあれだよ、ママチャリでオフロードを時速３０キロで走った後。
そんなシチュエーションがまずないけどね。
「どうした？乗馬は初めてだったか？」
「あぁ、初めてだったせいで尻が二つに割れそうだ」
「なに！？一大事だ！医務室へいこうか！？」
シャレの通じないナイトはその白い巨体を馬から下ろすと真面目にうろたえていた。
そのうろたえようは面白いけど、医者の前で尻をさらすのは勘弁なのでどうにかナイトを落ち着かせる。
「そうだな、尻はもともと割れていたな……」
「まぁ、よくある冗談ってやつだ。気にするな」
「しかし、伸也も人が悪い」
そういいながらナイトはフルヘルムの中で苦笑いをしていた（たぶん）
こんな古典芸にひっかかるとは思ってなかったにしろ、俺にも責任はあるとは思う。
が、これはどんな冗談だろうか？
爺さんの大掛かりな悪戯だろうか？
「なぁ、ナイト？」
「なんだ？神也？」
「これ……城？」

そう、俺の前にあったのは真っ白な城であった。
現実にありえないことに、俺は必死に考えをまとめようとした。
そういえばここまでくる時もやたらと古い町並みだなぁとは思ってたけど、所詮田舎町に来てしまったんだろうとか、そういえばナイトって白馬に乗ってるなとか、って事はナイトは俺の……
「白馬の王子様か！？」
俺の頭の許容量をオーバーした思考は、白馬の王子＝ナイトという結論に至った。
じゃぁここから始まるのは俺とナイトのラブロマンス……
「む？なにやら壊れたようだな？俺は王子じゃなく騎士なのに」
頭の中で危ない方向へ進む俺を担ぎ、ナイトは城の中へ向かった。
結局俺は医務室に行く運命だったらしい。

「俺はまだ心の準備が！？」
冷や汗かきまくりながら目が覚めると、そこは学校の保健室っぽいところだった。
学校と違うのは、壁紙なんかじゃなくただの白いレンガが壁を作っていること。
どうやら城に来てしまったのは本当らしい。
「しかし、危ないところだった」
額から流れてくる汗を拭きながら悪夢を思い出す。
「考えないことにしよう……」
俺はそう決めて、体を起こす。尻には痛みはまだあるものの、シップか何かを張ってあったので痛みは和らいでいた。
とりあえず、一達のこともある。どうやってここを抜け出そうか考えているときだった。
「僕心の準備がまだ！？」
「趣味じゃないって言ってんでしょ！」
……聞き覚えのある声がカーテン越しに聞こえてくる。
「危ないところだった。僕の貞操……」

「私は筋肉質なのは嫌いなのよ……」
カーテンを開けていいか一瞬迷ったが、ここで、時間を食うと彼らが鬱になるのは体験済みだった。
意を決してカーテンを開けると、案の定そこには一と雀がいた。
「神也？」
「ナイトじゃないのね！？」
なにやら心にトラウマを残しているようだ。
「無事だったか、一、雀！」
騎士の悪夢に捕らわれていた俺達は、やっと出会えた仲間にしがみついた。
「ナイトが、ナイトがぁ！」
「筋肉いや！筋肉いやぁぁ！」
「落ち着け！落ち着け！」
「そうだ、落ち着け！私がどうした！？」
横から美しい金の長髪を流した青い瞳の美青年が駆け寄ってくる。
どうやら俺達が目を覚ましたのに気がついて見に来てくれたらしい。
待てよ？私がどうした？
話題＝ナイト　内容＝私　私＝ナイト
ナイト？
「お前ナイトか～～～！？」
「そうだが？」
唖然として俺達はナイトを見る。
なんだ、これなら夢でも別に許可……しないけどね。
他の二人はまだノイローゼ気味に何かをつぶやいていた。
とりあえず俺の悪夢は驚愕が忘れさせてくれたらしい、冷静な思考力が戻ってくる。
他の二人が使えない今、俺が事態を把握しないといけないだろう。
聞きたいことは山ほどあるが、いくつかに絞って質問することにした。

「ナイト、こいつらは何でここにいるの？」
「あぁ、朝方俺が森で見つけた。ちょうどお前と会う二～三時間前だ。なにやら凄い技を持っておったのでな」
「そうか、んじゃ次の質問いい？」
「なんだ？」
「これは俺の爺さんの悪戯か？」
「爺さん？誰だ？」
今までの会話で、ナイトが嘘をつけないというのは分かっていた。
ということはだ、これは爺さんの悪戯ではないということだ。
で、それを考慮したうえで質問しなくてはいけないことがある。
多少は感じていることだが、一番聞きたくないことだ。
ＮＯはやめてくれよ？そう思いながら俺は、ナイトに最後の質問をする。
「ここは日本のどこですか？」
「にほん？なんだそれは、ここはｗｈｉｔｅ。Ｃｈｅｓｓ ｉｎ ｗｈｉｔｅだ」
なにそれ、世界地図には書いてないよね？
―じゃぁ、ここはどこだよ？
信じたくない答えは、僕の意識を再び奪った。

男前な女

ナイトに出会ってもう三日が過ぎた。
今俺達はナイトと共に馬車に揺られている。
「っていうか、日本はどこだろうね？」
少し遠いどこかを見ながら一がふと言葉を漏らした。
「日本がどこっていうか、地球はどこっていうかね」
「「うふふふふふ……」」
雀は受け答えすると、一と同じようには若干遠いところを見ながら笑いあっていた。
そう、俺達はよく分からないうちに見知らぬ世界に来ていた。
わけも分からないままここにいたが、今日きた手紙は俺達の状況を一変させた。
「あのクソジジイめ……」
怒りに震える拳をどこに向けていいのかも分からないまま、俺は昨日のことを思い出した。

「むぅぅ……元気を出さないかお前ら」
オロオロしたナイトが、俺達の前を右往左往して励まそうとがんばっていた。
世界地図に載っていない国で、俺達は心底気分がブルーだった。
「ナイト、お米とかない？」
腐った魚の目をした一がナイトの右腕にしがみつく。
旗から見ればただのゾンビだし、ナイトも顔を少し青くしていた。
「ナイトさん、焼き魚をぉ」
今度は雀が左腕にしがみつき、ぶら下がる。
両腕をとられてしまった俺はどこにしがみつくか……。
「神也！どうにかしてくれぇ！」
爺さんのトラウマのおかげで、比較的ショックの少なかった俺は

そんなナイト達を傍観していた。
まぁ、普通の人間ならもっと動揺するだろうし、一と雀も結構すごいほうだと思う。
俺が初めて遭難したときはもっと動揺してたなぁ
「神也ぁ！」
背中でナイトの叫びを聞きながら俺は思考を張り巡らせる。
昨日ナイトから聞いた情報を整理し、これからの状況を考える。
とりあえず、分かったのはここが地球などというところではないということだ。
ナイトによると、ボードというこの世界は、地球と違って球形ではなく円形。
要するに、中世ヨーロッパの天動説の世界みたいなところらしい。
実際、コロンブスのような人がいたらしいが、百年たっても帰ってきていないそうだ。
次に、この世界が二分に分かれているということ。
ＷｈｉｔｅとＢｌａｃｋという二つの国に分かれているらしい、そしてここはＷｈｉｔｅの国。
最近この二つの国が戦争しているらしくて、俺達は兵力としてナイトに迎えられたらしい。
しかも、何を勘違いしたか超ＷＩＰ扱いでだ。
というか、俺達どうなるんだろう？
そんなことを考えていたら急にないとの絶叫が止まった。
「どうした？ナイト」
二人の人間をぶら下げたままナイトは俺に端正な顔を向ける。
その顔は、今は武人の顔だった。
「神也、一と雀を離してそこにいろ」
そういい、俺に引き剥がした二人を預けると木製の頑丈そうなドアに体を向けた。
「誰だ？」
そういいながら、いつの間にかナイトは槍をその手に持っていた。

どこから出したんだろう？
不思議に思う俺をよそに、ナイトは槍をドアに突き刺した。
「ふん！なんともいえぬ無能ぶりだなナイト」
風穴の開いたドアの向こうから人を馬鹿にしたような声がした。
その言葉にナイトは苦虫をかんだような顔を見せ、槍をどこともなくしまう。
「お前か、ヨセフ」
きしんだ音のするドアの向こうから現れたのは黒い神父の服を着た女性だった。
何でこの人女なのに神父の服なんだろう？という疑問が浮かんだが、とりあえず違う世界ということでその辺は納得しといた。
っていうか、この人いったい誰だろう？
そんなことを思いながら、一と雀を両腕にぶら下げた俺はただ唖然とナイト達を見ていた。
「王の勅令でな、そうでなければお前のところなどこないさ」
「あぁ、俺もお前になど来て欲しくはない。ところで王の勅令とは何だ？」
顔をしかめているナイトに、同じく顔をしかめながらヨセフは、勝手に置いてあったイスに座った。
「お前が勝手に戦力を増強しただろう？全く愚かにしか思えないが」
「口を慎めよヨセフ、確かに勝手に増強したがしっかりと書類を送ったはずだ」
「そうだ。シンヤ、スズメ、ハジメとか言う三人だ」
「それがどうした」
「書類は直筆サインだな？」
「あぁ」
ナイトは何を言いたいのか分からないという顔でヨセフを見ていた。
どうやら問題は俺たちらしい。
「おまえ、書類の確認とかはしているか？」

「いや、してないぞ」
なぜか悪気のないナイトをヨセフは鋭くにらみつける。
「このわけの分からない字を見ろ！」
そういってヨセフが広げたのは俺たちが昨日（半ば放心状態で）書いた書類だった。
「何語だ？これ」
「私が聞きたい」
しまった！この世界に漢字というものは無かったらしい。
「書類は王に直通だ、こんなわけの分からないものでもな！」
そういいヨセフは書類を床にたたきつけた。ナイトもナイトで申し訳なさそうな顔を彼女に向ける。
「すまん、それをわざわざ言いに来てくれたのか？」
「いや、それがな」
ヨセフは長い綺麗な髪など気にせず頭をぼりぼり掻きながらため息をつく。
「王にはなぜか読めたんだよ」
「ほう」
「しかも同じような文字で、この者達に直々に手紙を書かれてな」
そういい胸元から手紙を出し、ナイトに手渡す。
「そいつらに渡しておけ、ついでに王からの召還命令もでている。お前とその者達にな」
「そうか、城はどうすればいい？」
「私が来たのはそのせいだ」
「すまんな、頼む」
「礼などいい、王の命令だしな。ところでその者達はどこだ？」
「あぁ、あれ」
あれとかいいながらナイトが俺を指差す。
「ふん、あれか。おい小僧達、王の前では無礼はするなよ」
彼女はそう言うと、来たときと同じドアから颯爽と出て行ってしまった。

ナイトは、大体の事情は分かっただろう？というと、苦笑いしながら俺から二人を引き剥がし、手紙を渡してくれた。
封筒を開いて広げた手紙には、予想だにしなかった……いや、ある意味では予想通りの差出人の名前が書いてあった。
―鬼頭　慎―
「爺さん……？」

男前な女（後書き）

更新遅れました。
こんなものでも見てもらえたら幸いですm（__）m

白の首都

「すげぇ」
馬車から身を乗り出して思わずつぶやいてしまった。
爺さんからの手紙で首都に呼び出された俺たちは、今まさに首都に入ろうとしていた。
「はぁ、欧米の昔の街って城壁で囲まれていたらしいけど、まさか本物見るとは思わなかったよ」
俺の後ろから雀が頭を出して驚嘆の声を上げる。
一も反対の窓から顔を出して驚きの声を上げていた。
「すごいね！何メートルくらいあるんだろう？」
興奮した顔で一が俺に話しかけてきていたが、正直よく分からなかった。
だって、なにこれ！？
普通だったら必要の無いほどの城壁にはこれまたどでかい門がついていた。
ところどころに開いている窓からは監視員でもいるらしく、望遠鏡にでも反射した光がちらちら見えた。
「ちょっとまってろよ？門が開くのにそれなりに手続きが必要だからな」
手馴れた仕草で馬車を降りたナイトはなにやら鏡を取り出し、一つの窓に光を反射させていた。
「モールスかな？」
「似たようなもんだろ」
雀と話しながらナイトのやり取りを見ていると、重い音をしながら門が開き始めた。
開き始めたのはいいんだけど……
「遅いよ！」
思わずツッコミを入れたくなるほど門が開くのは遅かった。

結局門が完全に開くには五分程度かかった。
しかし、その先には思いもしなかった素晴らしい景色が広がっていた。
皆さん、パリの凱旋門知ってますよね？知らなきゃ今すぐ調べて！
あんな感じの門の先に広がる緩やかな坂の道に並ぶレンガの建物、その中心の方に見える大きな城。
やべぇ、ここはどこのゲームの中だ！？
「「「すげぇ」」」
「首都は初めてか？」
俺たち三人が感嘆の声を漏らすと、ナイトは自分のものを自慢するかのような得意顔でこっちを向いた。
「ここはあれだぞ？王様がいるんだぞ？それに、えーと……そう！人がいっぱいいるしな！」
ナイトが馬鹿でもできそうな説明をしている間にも、馬車はレンガの道を進んでいく。
活気のいい街みたいで、声を張り上げる魚屋の声や子供の笑い声、二階建ての家の間にかけられた縄には洗濯物が旗のようにかかっていたりした。
道は坂のようだったが入り組んだ感じではなく、むしろ平安京のように碁の目のようになっているようだった。
そして、坂の一番上に位置する堅固そうであって、優美さを感じる城。
街を囲っていた城壁よりは小さいが、それでも俺三人分はある門が、ゆっくり開くと突然ファンファーレが鳴り響いた。
「うわっ！」
「なんだ！？」
「きゃぁ！」
どうやら歓迎のファンファーレのようで、城の中の中庭には綺麗に並んだ兵士達が敬礼の状態でこちらを向いていた。
突然のことに驚く俺たち三人をよそに、ナイトは当然のように馬車

を降りると兵士達に敬礼を送り返す。
「俺たちも降りるべき？」
「あぁ、さっさと降りて来い。ここから歩きだ」
急に凛々しくなったナイトは俺と雀を下ろした後、一だけ手をとりながら馬車から下ろした。
その姿は様になっていたけど正直ムカッとした。
「なんで、今だけそんな紳士面してるんだよ？」
「何のことだ？」
ナイトはそう言いながら俺達の前を先導する、周りからはファンファーレを鳴らしていた兵士達が興奮した面持ちでナイトを見ていた。
こんなマヌケな奴にどうしてあんな視線を送ってるんだ？そんなことを思いながら兵の前を通り過ぎる。
中庭から建物の中に入るための扉の前に立つとナイトは急にきびすを返し兵隊のほうを向いた。
「兵士諸君！今日は私達のためにこのような歓迎心から感謝する！このナイトは君達の期待に添えるようういっそうの努力をしよう！だが、兵士諸君！君達も私の地位を奪うほどの努力をせよ！さればわれらが王国はきっと安寧のときを得たるだろう！」
普段ならば思いもよらない力強い声で兵士を激励すると、ナイトは俺たちを連れて扉の中に入った。
扉の中に入ると、もうそこに兵士はいなく、目の前にある廊下を黙々と歩くことになった。
しばらくすると、質素な感じの扉の前で急にナイトが立ち止まった。
「うぅ、疲れた……これだから首都は嫌いなんだ」
突然いつもの口調に戻ったナイトが肩を落とす。
「どうしたの？ナイトさん」
さっきからの行動で、どうも偉い人に見えてきたナイトにさん付けで声をかけるが、反応がない。

やっと振り返ったと思うと、ナイトはさっきの凛々しい方ではなく、もとのナイトに戻っていた。
というか少し顔色悪い感じがする。
それでも、やっぱりさっきの印象が強かったので緊張が解けない。
「ナイトさんは何で急に変わってしまったんですか？」
「さん付けしないでくれるか？まだ仕事続けているみたいで気が滅入る」
「仕事？」
「あぁ、兵達の前ではしっかりしないといけないんだとさ。今さっき言った言葉だって実は徹夜で考えたんだぞ？」
そりゃぁ顔色も悪くなるはずだ。
「さっきの馬車で私を下ろしたのには他意はないわよね！？」
「そりゃぁないさ。あぁしないといけないんだって、礼儀として」
「でも前はしなかったじゃない」
「そりゃ仕事じゃないからな」
なぜか顔を赤くした一がナイトを問い詰めているが、他意が無かったのならばとりあえず放っておこう。
それより、さっさと先行かなくていいのかな？
多分あの扉の先なんだろうけど。
そう思いながら見ていると、突然扉が横にスライドした。
「スライド式かよ！」
どうでもいいところに突っ込む俺に、親指を立てながら現れたのはこの国の王だった。
「よう神也！久しぶりい！」
「やっと会えたなファッキンジジイーーーー！！！」
俺は心の叫びと共に王……爺さんにとび蹴りを繰り出していた。
うん、繰り出したよな？
でも、爺さんとの間にガラスがあったなんて……聞いてないよ―

優しいｃｈｅｓｓ講座（前書き）

実際にｃｈｅｓｓ教えてるわけではないです。

優しいｃｈｅｓｓ講座

「相も変わらず短慮なことで安心したぞ神也」
「あんたこそ、性格が変わってなくて残念だよ」
あの後ナイトは用事があるとかでどこかに行ってしまい、ここにいるのは俺と雀と一と爺さんだけだ。
王の趣味なのか、西洋の城の中に存在する畳の上で俺達は話をしていた。
名目上王の間は、どちらかというと殿の間という感じがしてしょうがない。
まぁ俺の爺さんの変態っぷりはこんなところから始まっているわけだ。
「しかし神也、痛そうじゃのう」
「まぁ、その元凶は目の前にいるんだけどな」
ところどころ包帯をしている俺に、気遣わしげな目を送ってくる爺さんにとりあえず毒を送っておく。
ちなみに、俺はガラスへのとび蹴りにより結構大きな被害を受けている。
参考までに言うと、頭と体にいっぱいガラスが刺さった。
つまり満身創痍。
ジジイめ、いつか仕返ししてやる。
「ところで、おじいさん。いい加減本題に入ってくれますか？」
「おぉ！そうじゃったな、ありがとう雀君」
雀の言葉に俺とにらみ合っていた爺さんは、雀達のほうを見る。
ちなみに雀達は俺の向かい合って座っている訳で、ということは俺は眼中に入っていないわけだが、まぁ話のほうが大事なので気にしないでおこう。
しかし、このジジイは本当に身内以外には礼儀いいな……
「雀君じゃったかな？あとそちらのお嬢さんは一ちゃんか？」

「はい、そうです」
「お久しぶり、おじいちゃん」
「おぉ、呼び方はまさしく一ちゃんじゃな。それに、雀君も久しぶりじゃのう」
爺さんは孫の俺を見る目よりも優しく二人を見ていた。
おぉ、俺って他人よりも他人的な肉親？
「まぁ挨拶はよしとして、さっさとここの話をせんといかんかのう。神也、お前も向こう側行け。ちーと真面目に話さなきゃいかん」
馬鹿なことを考えている俺に、真剣な顔で爺さんは言った。
「さて、どこから話そうかの。お前らがここに来ること自体予想外じゃったからの」
「そう、いったい何が原因なの？おじいちゃん」
「ふむ、とりあえず原因か。なぁ一ちゃん、ここに来る前は何をしてたんじゃ？」
「えっと、神也と雀の映画鑑賞会だったかな？」
「そうか、場所はコタツの下の隠し部屋でか？」
「そうっだったはずだけど、それが原因？」
「まぁの、あそこのパソコンが原因なんじゃよ。この世界の元凶ってやつじゃな」
パソコンというのはあのでっかいモニターだろうか？ということは俺が原因か？
うぅ、横の二人からの目線が痛い。
「そうじゃ！この世界のことを話す前に一つ、わしの研究しておったことを話してやろう」
「それはどうでもいいから話を進めてくれないか？」
「まぁそういうな、雑談程度じゃからちょっと聞いてくれ」
俺の的確な発現は見事に無視され、結局爺さんは雑談を始めてしまった。
「神也はいわずと知っておるが、一ちゃん、雀君、ゲームは好きかい？」

「本当に雑談だなジジィ……」
何の脈絡もない話を始めた爺さんに一瞬ポカンとする一と雀。
俺はというとこんなのには慣れているので気にせず茶でもすする。
「はぁ、よく神也とやってますけど」
「私も家でやるかな？まぁあんまりやらないけど」
「そうかそうか。まぁ、わしはゲームが大好きなんじゃがな？最近ゲームに物足りなさを感じていたんじゃよ。」
「「はぁ」」
爺さんの脈絡ない会話に戸惑い気味の二人をよそに俺は三杯目の茶を飲む。
こういうときの爺さんの話を真面目に聞くほど馬鹿らしいことはない。
「それでな、ゲームに求める何かが足りないんじゃぁないかと思ったんじゃよ。お前さん達は何じゃと思う？」
「そうですね……画質とか？」
「私はゲームがマンネリ化してると思うかな？」
「そうじゃのう、それもあるのう。神也お前は何だと思う？」
突然話をふられて口に突っ込んでいた大福を落とす。
茶に飽きた俺は爺さんの部屋探し回って大福探し、ついに見つけ出したところだった。
まぁ、当然のごとく話しは聞いていない。
「ゲームを面白くする要素は何かだそうだよ」
気を利かして雀が俺に囁いてくる。
おぉう、流石とかいてサスガ我が友。
でも、ゲームに求めることって何だろう？シナリオ？リアリティー？そんなもんか？
「シナリオとかリアリティーかな？」
「そうじゃな、気持ち悪いことにワシもお前と同じ結論に至った」
「本気でキモイな」
「だまれ」

さっさと本題は入ってくんないかな～と思いながらも大福を飲み込む。
まぁ、どんなに変でも家じゃぁこれが日常だったしな。
「とにかくじゃな？当時プログラマーだったワシはそんなゲームを作り始めたんじゃ」
あぁ、俺達はゲーマー爺さんの奮闘記録を聞きたいわけじゃぁないのに……。
横を見るとどうしていいのか分からない二人が俺に助けを求める視線を送ってくる。
ムリデスカラ、アキラメテ。とりあえずアイサインでそう送っておく。
「当時のプロセスとしては、現実世界と平行した物理原理を持ち、自己進化を続ける世界のプログラム」
「お爺さん……それとこれにどんな関係があるんですか？」
さっきまでの陽気な感じから急に落ち込んできた声に、いやな予感を振り払うように問いかける雀。
「プログラム自体はすばらしい出来じゃった。そして、プログラムの中に一つの世界が生まれた」
しかし、そんな雀の問いを無視する爺さん。俺と一は訳がわからないという顔で、爺さんの話しを聞く。
「しかし、プログラムだけでは何もおきない。それを動かす機体が必要だった。それも完成し、ついに試運転をしたときだ。問題は起きた」
最早俺達のことなど忘れたかのように爺さんは話し続ける。
「機体は私の発明品じゃ。リアリティーを出すため精神を電気信号に変え、電気信号を情報に変え、つまりは意識がプログラム内に入り込むということ。しかし、これは核兵器以来の粗悪品じゃった」
なんなんだ？爺さんの話は訳がわからないことばかりだ。
「あまりにも酷似した世界での外傷は、現実世界にも影響を及ぼすということ。つまり、その世界で死ねば本当に死ぬわけじゃ。それ

ゆえにそのプロジェクトは廃止になった」
　それがどうした？俺には関係ない
「しかしワシはあきらめられんかった。そして、機体をワシの秘密ラボに隠しワシ自身プログラムにダイブした。多分その時バグでも起きたんかのぉ？本当ならワシだけがプログラム内で生きることになるはずじゃったんだけど、設定を誤った可能性もあるのう……」
「おい爺さん、話がさっぱりつかめんぞ？」
　そう、さっぱりだ。多分誰がどう聞いてもさっぱりだろう。
　でも同じくらい嫌な予感がしていることだろう。つーか薄々気づいてんだけどねっ！否定したいお年頃♪とか混乱してみたり、鼻から茶すすってみたり、耳から……。
「ぶっちゃけ、わしのミスでそのプログラム内に迷いこんだっぽいんじゃよね、お前ら」
　あぁ、やっぱりこのジジイだけは殺すべきだわ。
　雀と一からも同じ空気を感じながら俺はこぶしを握り締めていた。

優しいｃｈｅｓｓ講座（後書き）

もう最近ごちゃごちゃですよ。
公私共にやることありすぎ（Ｔ－Ｔ）
数少ない読者の皆様ごめんなさいｍ（－－）ｍ

素直な気持ち

「じいちゃ？その子だーれ？」
ワシの家に神也がきたのは十年前の夏のことだった。
当時ワシの研究を手伝っていた神也の両親が実験中に死亡。
身内がワシしかいなかった為引き取ることになった。
「じいちゃ？」
仏壇の前で、前の家とは違う畳の床に慣れないのかモゾモゾと足を動かしながら孫が呼びかけてくる。
「ん？なんじゃ神也？」
「庭にいる子はだーれ？」
「あぁ、あの子は一ちゃんじゃよ」
縁側から見える縁側に立つ子供を指差す神也に笑顔で答える。
その頃は孫の同年代ということもあってか、ワシは近所の工藤さんの子供さんを可愛がっていた。
工藤一、この年代の子は性別が分かりにくく最初は男の子だと思っていたが、ちゃんとした女の子だった。
その日も、一ちゃんのご両親が家を空けるというのでワシが預かっていた。
「おじいちゃん、その男の子、誰？」
たいして広いわけでもないがそれなりに手入れをしてある庭で、恐る恐るといった感じにワシに聞いてくる一ちゃん。
一ちゃんも神也も、初めて会ったせいか緊張しているようだった。
この年代の子は人見知りが激しいからしょうがないが、今日から神也はここに住む。
近所という事もあるし、いずれ仲良くなって一緒に遊んでくれるじゃろう。
……ワシ、独りぼっちになるかな？神也がかまってくれるよう明日からがんばろう。

「おじいちゃん！あの子、誰？」
「あぁ、すまんね一ちゃん。あの子はワシの孫の神也じゃ」
「しんや、くん？」
実の孫のように接してきたせいか、一ちゃんはとまどったように本当の孫の神也を見ていた。
神也は神也でどうしていいか分からないようで、座敷の上で硬直していた。
ふふ、ウイウイしくてみてるワシが恥ずかしいわい。
「一ちゃん。麦茶でも入れてくるから座敷で待っててくれんかのう？」
「ん、分かった」
縁側からトテトテと走ってくる一ちゃんと、それを見てビクッとする神也の反応を楽しみながらワシは台所に向かった。
「一ちゃんって、男？」
「女よ！馬鹿ぁ！」
後ろから聞こえてくる二人の声に、笑いをこらえながらグラスを取り、氷をいれ、麦茶を注ぐ。
そういえば、ワシも初対面の一ちゃんに「男の子かい？」と聞いて怒られたの。
ははは、女心がつかめないのも遺伝じゃな。
「ほい一ちゃん、神也。麦茶じゃよ」
座敷に戻ったワシは神也と一ちゃんに冷たい麦茶を手渡し、ワシ自身も冷たい麦茶を喉に通した。
「じいちゃ！一ちゃんが足蹴ってくるよぅ！痛いよぉ！」
「私のこと、男とか言ったからよ！おじいちゃん！私、この子嫌い！」
「僕こそお前なんか嫌いだ～！うわぁあん！」
小刻みに神也の足を蹴っている一ちゃんを落ち着かせ、泣いている神也を泣き止ませ、どうにか二人に麦茶を飲ませ。
そんなことをしているワシが多少おかしく思った。

こうみえても、その世界ではマッドサイエンティストの名をほしいままにしているワシが、子供相手にオロオロするなど滑稽でしょうがない。
「一ちゃん、神也も悪気はなかったんじゃろうから許してやってくれんかのう」
当時はまだ引っ込み思案の神也にかわって謝ると、神也も無言で頭を下げていた。
なんだかんだ言ってまだ子供、相手に悪いことをすれば素直に「ごめん」といえるのだ。
そんな素直な子供の態度は同じ子供にはしっかり伝わるようで、とまっどたように一ちゃんも頭を下げた。
「私こそ、ごめんなさい」
「えっ？なんで？」
「あ、足……蹴ったりしたから」
「だいじょうぶだよ！僕は男の子だもん！」
さっき泣いていた事を棚に上げて神也が一ちゃんに胸を張ると、それがおかしくて笑ってしまった。
「じいちゃ、どうしたの？」
「おじいちゃん、どうしたの？」
「いや、なんでもないよ」
二対の真摯な目に見つめられ、なんとか笑いをこらえながら思う。ワシも、こんな風に素直に謝ることができればどれほどの事に後悔がなかっただろう。
「じいちゃ、麦茶おかわり！」
「私も！」
いつの間にか空になった二人のグラスを持つと、再び台所に向かう。
こんな生き方もいいかもしれないと思いながら麦茶を入れなおす。
でも、そんなワシがなぜか悔しくていじわるな考えが頭をよぎる。
「そうじゃ、せめて神也が自分自身を男だというにふさわしくなる

までしっかり育ててやろう」
とりあえず、明日から家の改造とかして神也にトラップとか仕掛けるか。
それはそれでマッドな考えが頭の中をよぎる。
そして十年後、過去のプロジェクトの事で新たな事実が判明した。
そして、開いてはならないパンドラの箱を開いた結果孫達にも災厄は降りかかった。
「おい爺さん！大丈夫か？しんみりしやがって」
いまや百のトラウマをもつ男の名を持つ男の異名を持つ孫が昔より大きな姿になって目の前にいた。
ある意味、男という名がふさわしい男になったんだろう。
「神也……」
「なんだ？爺さん」
「すまんかったのう」
「……」
「こんなことに巻き込んでスマンかったのう、いままで酷い仕打ちをしてスマンかったのう。……お前の両親の事も、スマンかったのう」
自然と涙が出ていたんじゃと思う。
たぶん、今まで素直にいえなかったから素直になった分流さなかった涙も流れたんだと思う。
「爺さん、一応俺は感謝してるんだぜ？」
「……」
「そりゃ酷い仕打ちもあったけど、今俺が俺でいれるのはそのおかげだし。今考えてみればめったにできない経験だし」
「……」
「それに、爺さんがいなきゃ俺はきっと孤児院に入ってたんだろ？だから、両親がいなくても俺は爺さんに感謝してる」
そんな光景が昔の神也と一ちゃんの姿とかぶって、また涙があふれる。

「おい、じいさんどうした！？なんか悪いこと言ったか俺？むしろいい事言ったつもりだったんだけど！」
「神也……」
「どうした！？」
「ありがとう」
いままで言えなかった。言ったこともなかった言葉。
きっとワシの孫はこれから様々な苦難にあうじゃろう。
でもきっと大丈夫じゃろう。
わしが鍛えた立派な男の子なのじゃから。

爺さんとガラスの関係

俺達の殺意が届いたのかしらないが、急に爺さんが泣き出した時はビックリした。
正直許せる問題でもない気がしたけれど、泣いた爺さんをみて、両親の事も謝る爺さんをみて、爺さんの我慢していた部分が見えた気がした。
だから許した。
でもな、爺さん？
泣かないでくれよ？
あんたに涙は似合わないよ。
だから……
お願いだから……
「いい加減泣きやめやぁ！」
勢いに任せ回し蹴りを放つ。ん？外道？ここでそうはこないだろ？ハハ！君達はしらないだろうが俺の家には家訓がある。
すなわち肉体言語！
正直こっちのほうが分かりやすい、拳は口より物を言うのだよ諸君！
「ふはは！許さなかった分の恨みを食らえ！」
俺は残り８５個分のトラウマの恨みを足先に集中した。
今ならアケ〇ノ位には勝てる気がする。
しかし、そんな俺の蹴りは爺さんの顔の前数ｃｍという所で透明な何かにぶつかった。
……ちょっと待て
「甘いのう神也、グスッ」
まだ頬に伝う涙を拭うと、爺さんはガラス越しにいつも通りの意地悪な笑顔を見せた。
とりあえず泣きやんだのはいいけど、他はよろしくない。
「お爺ちゃん」

隣で静かにしてた一が府に落ちないという顔で爺さんに話しかける。
どうやら俺と同じ疑問について聞きたいんだろう。
「なんじゃ？一ちゃん」
しかし、とうの本人は俺達の疑問に気付く様子もない。　よし、言ってやれ一！俺は陰から見守ってあげるから！
ちなみに、雀はこの不思議状況のなか美味しそうにお茶を飲んでいた。
この状況にまったく興味がないらしい。
なぜだ？不思議に思うだろ普通？だって……
「どこから出したのそのガラス？」
そう、爺さんの目の前にはさっき現れたガラス。
大体厚さ１５ｃｍはあるだろう、この和室に似合わないそれは手品かなんかで出せるものじゃない。　かといってこの部屋にトラップはなかった。
１００のトラウマをつくられた俺が言うんだから間違いない。
一も俺がトラップにかかるのを小さい頃から見ていたからそれは分かったようだ。
まぁ雀はそんなこと気にせずお茶を飲んでるけど。
「あれ？お前らまだこれ出来ないの？無からの創造」
「いやいや爺さん、んなことできたら神だって」
「一ちゃんも雀君も？」
「お爺ちゃん、普通そんなこと出来ないから」「僕もできないよ。当たり前だけど」
「あちゃぁ、ナイトが助けるのが早すぎたかのう」
「いやいやマテマテ、助けてもらわなかったら今頃死んでる」
一からの質問の答えは、『これくらい普通だろ？ほら無からの創造』という物理法則無視の珍答だった。
いやいや落ち着け俺！珍答だった。じゃないだろ？！
しかも爺さんはさも当たり前そうにいうし。

やばい、こっちに来てから混乱することばかりだ。
「あのな爺さん、俺達は生身の人間ですよ？ふぁんた爺（正しくはファンタジイ）なあんたと一緒にしないでくれないか？」
「ん？あぁ、そういや現実世界じゃ有り得ない話だったのう。ところで神也、この国の名は覚えておるか？」
「Ｃｈｅｓｓだろ？」
「そうじゃ、限りなく現実に近い電脳空間じゃ。馬鹿なお前でも流石に覚えたかの？まぁとにかく開発当初は物理法則も限りなく現実に近くしたんだがのう」
馬鹿と言われて怒った俺を無視しながらそこまで言うと、爺さんはそこで静かに茶をすすった。　そして静かに右掌を俺達の方に向けてきた。
「しかし、限りなく現実に近いこの国は、まったく違う歴史を歩むことにより、まったく違う世界になった。その代表がこの力『創造』じゃ」
そう言った爺さんの掌には、いまや無数の光の粒が踊っていた。
一が思わず手をのばすが、爺さんはもう一方の手でそれを遮る。
「危ないぞ一ちゃん、これはガラスじゃ。この『創造』は物理法則を無視して無からの創造を可能にしておる。しかし『創造』と言えど万能じゃないからのう。一人の人物にはその者特定のキーワードの物しか『創造』できん。儂の場合はそれが『ガラス』じゃ、こんなときにしか使えんから対神也用能力というところかの」
掌のガラスを近くのゴミ箱に捨てながら爺さんが笑う。
つーか普通要素無しですか、この国は？ホントに現実が恋しくなってきたよ。
「ちなみに『創造』はかなりの命の危険か、強い思いに反応することが分かっとる。この先『創造』無しはきついからな。明日から特訓じゃぞ！」
はりきる爺さんをよそに放心する俺達。
やばい、世界観違いすぎだろ？

そんな事思っていた時に、雀の言った言葉は印象的だった。
「強い思いか……なんか今なら『創造』できそうだな……」
激しく共感した俺は大きく頷いた。

明日から、特訓が始まる。

爺さんとガラスの関係　　（後書き）

ご気付きの点や批評、批判は評価の方にお願いします（＾＾ゞ
マジでお願いしますｍ（＿＿）ｍ

死闘！白銀の槍

拝啓　爺さん
今日僕は死ぬかもしれません
あなたのせいで――――
手短に説明しようと思う、この状況を。
むしろ、この状況がいたって簡潔なため、それ以上の説明が出来ないです。
本当に簡潔だよ、うん。
ボクハ今、命ヲ狙ワレテマス
「ナンデヤネ～ン！なんで俺が狙われてるんだよ！？」
後ろに迫る槍の気配に体をよじると、ついさっき顔があった所を抜けてすぐ横の木に銀色の凶器がささった。
冗談じゃない、なんでアイツに命を狙われなければなんないんだよ！
「上手く避けたな……だが、次は外さん」
そう言ってナイトは槍を『創造』した。
どうやらナイトの『創造』は自分の槍を手元に戻す力で、どちらかというと転送のような力らしい。
かといって、それを知ってこの状況がどうなるわけでもない。
事実、奴の槍を捨ててしまえばいいと思い沼に捨てれば、次の瞬間俺の左耳をかすめ、ナイトの槍を捕まえてしまえばいい思いって槍をつかんで逃走すれば、いつの間にか俺の手からは槍は消え、次の瞬間には俺の足元に飛んでくる。
どうやら場所や状況にかかわらず、槍だけが手元に帰ってくるらしい。
聞いてみれば地味な能力だと思うでしょう？そう思った方は俺と交代してください。
「シヌゥウウ！」

という感じになりますから、確実に。
「ちょっと待てナイト！何で俺が狙われてんだよ！？敵でもないだろ俺たち！？」
いい加減走り回るのに疲れて（ちなみにナイトは馬の上）俺はナイトに向かい合った。
ナイトとの距離は馬と人間の脚力の差からもともと無いようなもので、むしろ今まで少しリードできていた俺が若干人外くらいの実力だと思う。
その超至近距離から再び鋭い風きり音と共に放たれる銀色の凶器。
「しぬからぁあぁ！」
ブリッジの状態でぎりぎり避けると、バク転の要領で距離をとる。
「意外としぶといな……」
「いやいやナイトさん！落ち着いて！俺を狙わないで！つかなんで狙うの！？敵じゃないでしょ！友達でしょ！」
「うむ、その件なんだがな……俺は別にお前を殺したくも無い、確かに俺たちは友人だしな」
「だったらなぜ狙う！？」
「国王の命だから逆らえん」
「あの……糞ジジィイイイィ！」
うっそうと茂る木々の葉に、にやりと笑う爺さんが見えた気がした。
「まぁそういうことで、死ね」
「躊躇０ですか！？」
今度は俺の右耳をかすりながら槍は彼方へ飛んでいった。
が、経験上どこに飛んでも関係ない、槍は瞬時にナイトの手に『創造』される。
死ぬ！死んでしまう！ナイトは武将だから現代っ子の俺には想像できない武芸の腕だ。
このままじゃほんとに死ぬ！
再び逃走を始めた僕は昔の経験を生かし、ツタを避け、枝をくぐ

り、障害物を利用しナイトとの距離を広げる。
その経験もあのクソジジイに作られたことだった。
あれ？俺って爺さんいないほうが幸せじゃない？
そんな事を考えたのがいけなかったのかもしれない。木の根が俺の脚をすくい、俺をこけさせた。
今の状況からいうと最悪としかいえない。
事実、その瞬間に俺の髪の毛を切りながら白い閃光が空を走っていった。
枝や、落ち葉を踏みしめる音と共に近づいてきた白馬を地べたに這い蹲りながら仰ぎ見た。
そこにあるのは絶望、しかしこの時俺はその光景に一条の光明を見た。
その光明にすがりつくように俺は立ち上がると、俺は再び正面からナイトを見る。
「覚悟ができたのか？」
答えを返してやる余裕などない、俺は必死にアソコまでの逃走経路を練っていた。
ナイトの手には先程投げたばかりの白き槍。
おそらく、アソコは奴の攻撃範囲だろう。しかし、他に逃げ道は考えられない。
ならばどうすればいい？
簡単なこと、ナイトが攻撃できなくなればいい。
チャンスは一度だ。たぶん、ばれたら次はない。
「王の命により！その命頂戴！」
振り投げられた槍が俺を襲う。このコースは俺の頭蓋を狙っている。
しかし、頭なんていうのは人間の体では小さな的のようなものだ。
俺は、ナイトの槍をギリギリ見切って馬の目の前に飛び込む。
予想外の動きに戸惑うナイトの姿が馬の上に見えた。
しかし、それ以上に驚くのは馬である。急激に近寄り俺の殺意に

まで似た気迫を与えたため、訓練された馬といえど混乱せずに入られなかったのだろう。
結果、馬のとった行動は、前足を大きく天に上げる動作。
「うぉ！？」
馬の混乱によりナイトの体制は崩れ、更には馬の胴で俺の姿が見えなくなる。
「これを待っていたんだ！」
俺はそう叫ぶと、一気に馬の足元に駆け込む。
そう、俺が企てた計画はナイトに対するものではなく、彼の馬に対するものだった。
人馬一体、それは現代においても高く評価されることだが、それ以上に馬に依存し隙を生みやすい。
この隙も意味もなく作ったものではない、俺が狙っていたのは先ほど見つけた逃走経路だ。
それは地面に空く穴、多分風穴だろう。
日本における富士の樹海に多く見られる風穴は、溶岩が固まってできたらしい。
崩れやすいうえ、ほとんどが一個の穴としていることが多く、落ちたら大抵氏を覚悟するといい。
しかし、他の風穴に繋がっている例もあった。
つーか体験したことがあった。
あの時は爺さんに富士樹海に投げ込まれて、偶然空いてた風穴にナイスイン♪
持っていた荷物の中から懐中電灯出して、風穴内をさまよった。
偶然出口が横穴だったから良かったけど、直下型だったらどうなってたんだろうか。
話がずれたけど、結論から言えばこうなるのだろう。
確実な死よりわずかな可能性にかける。
まぁいざとなったらロープもあるし、脱出できるんじゃないかな？
どーやってロープ設置するかは知らないけどね。

……絶望か。
ナイトに存在を気づかれないよう、無言で穴に身を滑らす。
そういえば、雀と一はどうしたんだろう？
意外と深い穴を滑り落ちながら俺はそんな事を考えていた。
光の見えるほうからはナイトの戸惑う声が聞こえた。
「悪ふざけが過ぎたか！？やばい！あいつが消えると……」
……悪ふざけだったのかよ、んじゃ雀と一は城の中だろうな。
おふざけで死の危険に陥ったのかと苦悩する暇もなく足は地に着いた。
どうやらそこまで深くはない、だけどロープは届かない。
そんな場所に下りてしまったらしい。
「はぁ……」
ため息をこらえきれずに吐くと、俺が落ちてきた穴を見上げる。
一応光は届いているが、この先は今俺の目の前にある闇の中を進むしかないだろう。
しょうがない、どうやら今日は探検だ。
幸い、風を感じるから出口はあるだろう。
「こういう時だけ、爺さんに感謝だな」
トラウマによる経験、技術を武器に俺は闇という化け物と戦うことを決めた。

死闘！白銀の槍（後書き）

いつも読んで下さってくださるあなたに感謝……
貴方ですよ！そこの貴方！
このページはこれを呼んでいる貴方に対する感謝の気持ちなのです。
それとペース遅いっすかね？
まぁ遅いとは思っているのですが、よろしければ意見をください。
できる限り善処してきます（＾＾）

少年

「今頃一達は何してるんだろう？」
光のない洞穴の中、どうにか手探りで風の吹いてくる方向に進んで三十分以上たっただろう。
普通に歩けば五キロは歩けるだろうが、この状態だと一キロ歩けたかすらも怪しい所だ。
地下だということもあって、湿気が高く、なんかよく分からないものを踏んだりもしたけれど、とりあえず気にしないことにした。声の反響からして穴の大体の大きさは分かるが、たまに穴が開いているので油断はできない。
「まぁなんだ？俺はどうしてこんな状況にいるんだ？とか、爺さんのせいだよな？とか、あの野郎帰ったら速攻で殺すとかな」
闇というのは本当に不思議なもので、恐怖が自然と襲ってくる。そんな中を一人で歩くとなると自然と独り言も多くなってきてしまう。
思考すらネガティブになってきたし、この調子なら俺は一時間後には諦めてると思う、きっと、いろいろ。
「そもそも悪戯の時点でありえない、何がしたいんだあいつら？」
床がどんな状態かも分からないので神也は壁に背を預けて、これまでの事を考えることにした。
背中でプチィチョパ！とかいう変な音が聞こえたけど五回目くらいなので命に別状はないと思う。
そう信じたい。
まぁそれはいいとして、とりあえず話を整理しよう。
あれだな？爺さんの城に一泊して、朝起きたら朝食が用意してあって、久しぶりの純和風朝食に涙したんだったな。
んで、雀と一が爺さんに呼び出されたから俺はナイトに誘われて城の近くの森に遊びに来たわけだ。

そしたらナイトがいきなり俺の命を狙い始めて？んでそれは爺さんとナイトのお遊びでした♪っと。
考えを整理してみてもやっぱり一方的に理不尽だよな？
「うん、トラウマ一つ増えたかな？なんだ？その、暗い所怖い、暗い所怖い」
ヌチョッという嫌な音を糸引きながら立ち直すと、自然と震える肩を抑えながらまた手探りで前へと進む。
前へ進むしか道がないから歩を進める。
未開の地を切り開く気持ちってこんな感じなんだろうな。とふと思った。
なにがあるか分からなくて、手探りで少しずつ進んで、新しいものを見つけて。
んで、得体の知れないものを踏んで、得体の知れないものが顔について、生暖かい何かが背中に垂れるんだろうな。
でもきっと、そんな先に光が見えるんだろうな。きっと人生も同じようなものだろう。
最後に光が見えるんだ。きっと、あんな感じに……光が。
「光が！？」
気づくと、かすかにだが足元が見えていた。
さっきまでは本当に、自分の手すら見えない闇だったのが、ようやく輪郭ぐらいは見えてくるようになった。
もう手で探りながら歩く必要もなく、輪郭を見ながら、それでも慎重に歩いていった。
だんだんと輪郭は色を持ち、次第に体についた緑色の液体までしっかり見えるまで光は強くなっていた。
つまりは、やっと出口につけた。
「やったぜコンチクショウ！」
あまりの嬉しさに扉のような形をした出口をハイジャンプしながら飛び出した。
ハイジャンプしたのがまずかった。

一瞬のうちに感じる無重力。いや、この場合は重力か？
とりあえず、着地場所の確認はしっかりしましょうって話ですね。
絶望からの脱出、そしてまた絶望へ？
落ちたのはほんの数秒ほどだったけど、とりあえずこれだけのことを考えることができた。
きっと走馬灯って、これのすごいバージョンでしょうね。
「いたっ！」
さっき俺が飛び出た穴は頭上三メートルくらい上に確認できた。
どうやら死ななくてすんだらしい。
「ケツがぁぁぁぁ！」
まぁ無傷ってわけにも行かなかったけどね、具体的にいうと尾てい骨強打。
二回転位して、転がる元気もなくなって三分、ようやく痛みが治まってきた。
とりあえず崖とかでなくてよかった、下手したらケツから頭まで串刺しとかもあったかもしれないしね。
「しかし、まぁなんだ？この人工的雰囲気たっぷりな所は？」
辺りを見渡すと、そこは簡単に言えば神殿だった。
俺の前に一直線に間隔を置いて並ぶ薄青色の円柱、正確に言えばそれが縦横に広がって、巨大な部屋を支えていた。
俺が落ちてきた穴は壁に開いていたのだが、反対側の壁は見えないし、このままだと出口の方向すら分からないだろう。
「なんていうか、地下神殿みたいな感じか？どこまでファンタジーなんだよこの世界……」
どっかのゲームでありそうで、絶対にないこの状況に軽いめまいがした。
とりあえず、歩かなければどうしようもないだろうと思い壁沿いに歩き始めた。
歩くたびに響く足音が、静寂の支配する空間に俺の存在を嫌にも浮き上がらせていた。

歩いて五分もすると、その反響音が心底憎くなってきた。
なんかここに終わりはありませんよ？って気分にさせるんだよね
この音。
いっそのことリズムを刻んでみますか。
「よし、んじゃあれだ白鳥の湖の感じで」
軽快な足運びで優雅な白鳥を演じる。
あくまでバレエの微かな足音が神聖な空間に優美さを生む。
これぞ芸術、ビバ・バレエ……
「いかんいかん！壊れ始めてるぞ俺！」
独りぼっちになって、はや一時間、独り言も普通になってきてし
まった僕はきっと壊れ始めているのでしょう。
それよりこの部屋って終わりないんでねぇの？
実は入り口はあるけど出口はないとか？
「そういやさっきから誰の足音も聞こえてないしな……」
しかし、ここに来るまで壁を見ていたがどうやら穴は俺が落ちて
きたところは無いようだった。
つまり、ここから風が来ていたということは出口がきっとあると
いうことだろう。
とりあえずは、それを探して歩く。
ひたすら続く薄青色の世界に、ひたすら響く靴の音。
永遠に続くかと思うその状況が変わったのはそれからどの位たっ
てからだったのだろう。
目の前に、そこに似つかわしくないものが現れた。
「なんだ？これ」
そこにあったのは確かに機械だった。
この世界はお世辞にも工学は発達していない、よくて木製歯車と
か風車、水車。
しかし、これは違う。
多分現実世界でも希少なぐらいの技術がこめられた機械。
用途も動かし方も全く分からないが、あらゆる意味でこの世界に

もっとも似合わない物体だった。
「それは、母さん達が残してくれた現実への扉なんだ」
突然後ろから声がして、振り向くとそこには奇妙な少年がたっていた。
いや、外見からすれば奇妙なところなど何もない。
しかし、対峙している神也には感じられた。
この少年は存在していない、いや存在はする？
「そうか、君は僕を知らないよね？僕は父さんと母さんに、嫌と言うほど君の話しを聞いたのに」
そういうと少年は異常なまでの敵意を持った目を俺に向けてきた。
しかし、彼の両親が俺を知っているなどあるはずがない、ましてや恨まれる筋合いなどない。
「君は、誰だい？」
「僕かい？それはまだ秘密にしとくよ。とりあえずは君の敵って覚えといて」
そういうと少年は俺のそばに近寄ってくる。
確かな足音と共に。
おかしい、俺は俺以外の足音は聞こえなかったはずだ。
なら、この少年はどこから現れた？
「まったく、隙だらけだな。これだからぬくぬくと育った奴は」
「え？」
「大嫌いなんだ」
少年から発せられた異常な空気に、思わず後ろに飛び下がった。
なにが起きたのかは分からないが、俺が今さっきいた所は何かが危険だった。
それだけが、なぜか実感できた。
「へぇ、よく避けたね。まぁ今日のところは力の把握をしたかったんだけど……」
避けたね？ということは何か仕掛けてきていたということか？
「君は普通の人より特別なようだね、きっとある条件がそろわない

と駄目だろう。多分それはトラウマの数……かな？」
何を言っているんだろうこの少年は、わからないワカラナイ分からない。
「いったい、何をしたんだ？」
それが、俺の言える精一杯だった。
おそらく、俺より五歳は年下の少年に、俺が言える精一杯。
「言うはずないじゃんバ～カ、まぁ今日はもういいや、出口はあっちにあるから帰っていいよ」
そういって少年は機械のある方向の真逆、つまり俺の来た道を指した。
「おまえは、いったい？」
「いい加減にしろよ？俺が帰っていいって言ったんだ。さっさと帰れよ」
不覚にも、全身に感じたことのない寒気が走った。
それだけの殺気、それが一気に俺の体を貫いた。
「あれ？もしかして今ので動けなくなっちゃった？アハハ！ゴメンゴメン、んじゃ僕が先に帰るとするよ、またね神也君」
高らかに響く無邪気な笑い声は、足音と共に遠くに消えていった。
俺はそれを、首も、手も、足も、恐怖で動けなくなった体でただ見送ることしかできなかった。

少年（後書き）

久しぶりでございます。
きっと、この糞作者が（貴重な）読者をないがしろにしやがってコノ野郎と思われているでしょう。
しかし作者は読者を崇拝しておりますゆえ見放さないでね、愛してる（＞３＜）こんな顔文字打つ俺はきっともう駄目だｏｒｚ

森と猿と

「出れた…」
今、俺の周りを囲んでいるのは青々と茂った木々。
小さくも美しい鳥の鳴き声が、幾重もの重奏により壮大に調べを奏でている。
ぶっちゃけそんな事は関係ないんだがな
何にかって？
今の俺の開放感さ！
「空気が新鮮！壁が青くない！あと出口が分からないという恐怖もない！ビバ！フリーダム！」
あはははは！
思わず笑いながら駆け巡っちまうぜ！
そりゃ公子も忍者の修業したりファフニールも眠らすわ！
もうだめポ？耐えられない！
「いかんいかん、落ち着けよ俺…」
どうやら我をわすれていたな。
見苦しい事この上ない…
とりあえず現在の状況をまとめるとだ。
ナイトに襲われて、風穴落ちて、神殿にたどり着いて、少年に襲われて、ついでに出口教えて貰って、脱出。
濃い1日だったなぁ…むしろ半日なんだがな。
（やっと訪れた安息か…）
そう思ったら、自然と腰が落ちた。
疲れのピークともいう。幸い、地面は柔らかい草でおおわれていた。
けっして得体の知れない何かではない。
……あの暗闇は、前にもましてトラウマになったな…絶対。
……ガクガク…
「ふぃ～。しかし、水飲みたいね」

震える足は気のせいだよ？
うん、きっと。
でもま、実際の話喉は渇いていた…
考えてみたら当たり前なんだが、朝食以来なにも飲んでないな。
…湿気の異様に高い所にいはしたが、飲む度胸は無かったんだ。
なんか、ねちゃついてるんだもん。
今服についてる（風穴産）はアオミドロ色してるし…
…俺、大丈夫カナ？
「とにかく水飲みたいね～…。服、体洗いたいね～…」
なんか、考えるのも疲れたな…
（もういいや、一旦寝よう）
そう考えた時には上半身も倒れていた。
ゆっくり瞼を落として眠ろうと思った。
結論から言おう、無理でした。と
『ウキャ？』
「ウキャ？」
奇妙な声に目を開けようと…
『ウキャ～！』
ドスン！
「ぐぇ！？」
腹に襲いかかる強烈なGに思わず飛び上がってしまった。
いや、実際は上半身起こしただけなんだが…
『ウキャキャ！？』
腹に乗っていたそれは当然転がり落ちた。
それ
つまりは猿
猿？
『キャ！キャ！』
どうやらこの猿、今の何かツボに入ったらしく、俺を押し倒してくる。変な意味なしで。

しょうがなく寝そべってやると、また腹に飛び乗ってくる。
ドスゥ！
「ぐふぅ！」
いつもの2倍のジャンプで４００万パワーか…やるな！
シャレにならんほど痛いぜ！
『ウキャ！ウキャ！』
「は？」
『フー！』
む、よく分からん。
猿語は理解できんしな
ま、とりあえず起き上がろう。
コロン
『キャ！キャ！』
「……」
あれか、転がるのが楽しいのかこの猿。
さすが野生動物。意味分からん。
『フーッ！ウキャッキャ！』
また猿が俺を押し倒してくる。このままだとヤバい！
戦争男に殺されてしまう！
「待て猿！話を聞け！」
『ウキャ？』
（日本語通じるのか？そういやナイト達も文字違うみたいなのに…）
『フー！』
「おっと、すまん。考えごとしてた」
『ウキ』
「つまり猿、お前は転がるのが楽しいのか？」
『ウキ』
首を縦に振っている。なんて賢い猿だろう。
つか、俺が猿語を理解はできないんだな。
っと、気を抜くとまた猿が押し倒してくるな。

「猿、取引しないか？」
『ウキ？』
「もし水…あ～川の場所を教えてくれたならば」
『キキキ？』
「俺が貴様に回転する技を教えてやろう」
『キキッ！？』
「もし不満なら、前に回る術まで教えてやる」
『キキッキ！？』
「乗るか！？」
『キーッ！』
目を輝かせて俺を見る猿に輝く笑顔を返してやった。
ま、前方回転と後方回転教えればいいだろ。
ちなみに、川と頼んだのは理由がある。
川の周りには人が集まるからだ。
つまり俺は、喉の渇きとともに帰還の道を得たわけだ。
爺さんのトラウマがいきてるなぁ…
泣きだい……
とにかく俺は、猿という野生の案内人に手を引かれ、帰還の一歩を踏み出した。
踏み出して、数秒
『キキッキ』
着いた

ふざけんな。
歩いて３０秒とか、俺鈍感すぎだろ！？
猿は猿ですごい目輝かせてるし！
『キキッ』
「まぁ約束だしな」
とりあえず猿に前方回転と後方回転教えてやった。

やべぇ、すごい楽しそうだ。
…少し良心が痛まないでもない。
「ま、それはともかくとして、一浴びしますか」
結局今日はここで野宿になるかな？
日も落ちてきたし。
『キ』
「おう？」
体を洗っていると猿に背中をつつかれた。
懐かれたな、と苦笑しながら振り向くと、そこにはバナナが1房置いてあった。
「くれんのか？」
『キ』
なんだか無性に嬉しくなって、気付いたら猿の頭を撫でていた。
「な。猿」
『キ？』
「ついてくるか？」
『キキッキ！』
首を縦に振る猿に妙な愛着を感じた。
なんか、猫みたいな猿だなと思ったが…
「んじゃ、お前の名前はアメかディオな」
『キ！？』
「アメじゃ変だしディオでいこう」
『キキキ！？』
ま、これで旅仲間はできたんだ。
そう考えたら、気分が妙に晴れてきた。
「ディオ～回転ばっかしてんなよ～」
『キキィ』
なんとか焚けた火を前に、夜のとばりが落ちていく
それは昼間に比べ、とても優しい闇だった。

森と猿と（後書き）

まだ書く気あったんだ。この作者
ありました。スイマセンm（＿＿）m
なんとか完結まで持ってきたいなとか
でも文の書き方苦手だなとか

あれ？すでに俺って敗者？

その頃の彼ら

『キキッ！』
「ん～？」
甲高い声に起こされて目を開けると、猿がこっちを覗き込んでいた。
って、どんな状況やねん。
「な～んてなぁ」
自分で考えたボケにじぶんでっツッコムのはむなしい気もするが、
まぁそれはよしとする。
「おはよう、アメーディオ。もといディオ」
『キキッキ！！』
朝から元気良く前方回転をするディオに、少し苦笑してしまう。
っつーか、どんだけ好きなんだよ前方回転。
まぁ、いいか。
「さて、今日はひたすら歩くかぁ！」
『キキッ！』
最高の空元気でテンション上げる俺に、右手を上げて応えてくれる
ディオ。
うう～ん、妙に愛らしい。
「っと、んじゃ行くか」
そうして、俺とディオは川沿いに歩き出した。

「え？神也が行方不明？マジで？」
その日、ワシの下に来たナイトからの情報はかなりヘビーなものじ
ゃった。
「申し訳ありません、どうやら近くの風穴に落ちたらしく……この
ナイト、一生の不覚！」
「まぁ良いじゃろ、伊達に鍛えちゃおらんから死んではおらんだろ
うよ」

内心の焦りを抑えながらも、冷静に応える。
それが、こちらで王になったワシの役目。
というか、おんなじ様なことを昔仕掛けたことがあった記憶があるから大丈夫じゃろうし。
「は、しかし、神也を放っておくわけにもいきません。今日一日、私に休暇をいただけないでしょうか？」
目の前のナイトが深く頭を垂れながら、そう述べる。
いつまでたっても責任感の強すぎる男じゃな。
などと思うが、それを今日許すわけにもいかんのが辛いところじゃの。
「駄目じゃ」
なるべく冷たく言い放つ、そうやって退路を断つ。
「何故！？」
「まず一つ、お前には昨日仕事を頼んどいたじゃろう？神也たちの育成。まぁ昨日に関しては神也のみにしぼったがの」
「だからこそ！肝心の神也を……！！」
「あほう、仕事は神也『たち』の育成じゃ。それとも一と雀はどうでもいいのか？」
「そ、それは……」
「今のやつらでは、この世界では生き残れん。それはわかるじゃろう？」
「……・しかし、神也は？」
「そこで二つ目じゃ。あれを誰の孫じゃと思っとる？ワシの孫じゃぞ？鍛え方が違うわい！」
「……は、心得ました」
返事はしたものの、ナイトの顔は納得の言った顔ではなかった。
ま、正直な話をすると不安は残る。
先ほどナイトと話していたとおり、今この世界はだいぶ危うい状態である。
そもそも、チェスというゲームを基盤にしたこの世界は、常に勢力

が二分するように設定されている。
すなわち『ブラック』と『ホワイト』という世界。
最近までは、様々な事情もあり協和関係を保っていたんじゃが……
最近色々とそれが崩れてきておる。
「さて、どうするかの……」
玉座というのが性に合わなかったので作らせた和室、その上座の座布団にどっかと座る。
「……私は命令どおり、雀達の育成に向かいます。」
「うむ、任せたぞ」
引き戸を開いて出て行くナイトを見送りながら再び思考をめぐらす。
ここ数年の二国間についてである。
「そも、何故関係が崩れた？やつらは何をしとる？」
和室にたたずむ一人の王は、そうして敵国の二人を思っていたのだった。

「なんかさ、最近私達影薄くない？」
「しょうがないんじゃない？養ってもらってる身だし。いわゆるニート？」
城の中の一室。正確には雀に割り当てられた一室ではあったが、そこで雀と一は話をしていた。
昨日から神也がいないというのには気づいていたが、彼のお爺さんの性格は二人とも知っていたので特に気にはしていなかった。
「ところで、今回神也はどんな目にあってると思う？」
「ん～、なんだろ？落とし穴とか命狙われたりとか？」
「だったら面白いわね」
「「アハハハハ」」
実際に起こったことと類似しているのが微妙に恐ろしいところである。
「失礼する……」
そんな陽気な部屋に陰気に入ってきたのはナイトだった。

「どうしたの？なんかあったの？」
「いや、神也を王の命令で特訓……命を狙う振りしてやったんだがな、そうしたら風穴に落ちて行方不明だ……」
「「アッハハハハハハッハ！！！！」」
さっき予想していたことと見事にあてはまっていて笑うしかない二人が、廊下まで響くように爆笑する。
しかし、状況の分からないナイトにはその笑いが理解できなかった。
「おい！神也が行方不明なのに友人のお前らは心配じゃないのか！！」
「いや、そうじゃなくて……」
笑いすぎて息が乱れたのか、雀が息を整えながらナイトの方を向く。
ちなみに、一はいまだに悶絶している。
「いや、まぁ笑っていた理由はともかくとして、そんなに心配する必要ないよ？」
「……何故だ？」
当然のようにいう雀の言葉にナイトは当惑していた。
王といい、雀といい、何故彼らはあの少年をそこまで信用できるのか？
「だって、神也は僕の親友だもん」
答えになっていない、しかし、絶対の自信を感じる言葉。
つまりは、関係の浅い自分には分からない何かがあるのだろう。
「そうか、分かった」
「うん」
微笑むナイトに微笑み返す雀。
いまだに一は笑い転げているが、それは気にしない方向で。
「と、そうだ。今日からお前らも特訓だ。お前らの技量では少々危なっかしいのでな」
「うん、分かった」
「じゃぁ、まずは一をどうにかしようか」
「このままじゃ話し進まないしね」

そういうと二人は、気が進まないままに一を正気に戻そうと苦戦するのであった。

その頃の彼ら（後書き）

久しぶりに作ってこのざま……すいませんＯＴＺ
お久しぶりですスクナです
こんな幼稚な作品でも見ていてくださった方（リア友かもしれないが）がおりましたので、がんばって書こうと思いました。
お客様は神様ですとも。えぇ。
実は、前の話の切り方が微妙で書きづらいというのが長期更新停止の要因の１つでもありました。
ようするに技術が未熟なわけで……
まぁ修行しろというわけですね。
頑張ります。
そんなわけで、これからも生ぬるい目で見守りくださいますようお願いいたします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5845a/

---

chess〜敗北ノ世界〜

2010年10月11日14時43分発行